

大音響より詞、ギター一本の恩返し

75年「時代」

今では考えられないことだが、デビュー当時の中島みゆき(45)には「生意気」「ツッパリ」といったマイナスイメージが先行していた。北海道出身の中島が全国区に躍り出たのは、1975年(昭50)11月に東京・北の丸公園の日本武道館で行われた第6回世界歌謡祭だった。彼女は「時代」でグランプリを獲得したが、そのステージで起きた"事件"が、中島の「生意気」イメージを生むことになる。

世界歌謡祭には、その年のポピュラーソングコンテスト(ポプコン)で優勝した新人歌手が自動的に出場した。中島もそんな新人の一人だった。グランプリ受賞後のアンコールで、中島はオーケストラの指揮者に何やら耳打ちした。そして突然、伴奏なしのギター一本で「時代」を歌い始めたのだ。前半のエントリー曲紹介では、フルオーケストラをバックに「時代」を力強く歌っていた。しかし、アンコールでは一転してオーケストラの演奏を自ら制止し、ギター一本で歌ったのだ。

まさに前代未聞の新人だった。オーケストラのメンバーや現場スタッフは激怒した。新聞や雑誌にはパッシング記事が相次いだ。しかし、ギター一本で「時代」を歌ったのは決して中島のわがままではなかった。自らを発掘してくれた"恩人"へのお礼のつもりだったのだ。

"恩人"とはヤマハ音楽振興会の理事長で、ヤマハのワンマン社長として知られた川上源一氏(85)だった。69年にポプコンを創設した川上氏は、毎年、全国から寄せられた応募曲を全曲聴いた。中島が「時代」を応募した74年はポプコン人気のピークで、応募曲は軽く1万曲を越えた。川上氏はその中から「時代」を耳に留めた。そして、無名だった中島を浜松の自宅に呼び、こう激励した。「あなたはすごい詞を書く。将来、詞で勝負するようなアーティストに育てて欲しい。できれば大音量をバックにするよりも、ギター一本で歌った方が、あなたの詞が人々に伝わると思います」。

中島はその言葉を心に刻み、世界歌謡祭のラストでギター一本で切々と「時代」を歌い上げた。振興会で世界歌謡祭の担当者だった山口昌則氏(50)は「当時、ポプコンの担当者達はサウンドばかり注目していて、はっきりいって詞は盲点でし

た。中島さんの詞の可能性に注目したのは川上さんだけ。今でも頭が下がる思いです」と振り返る。

ポプコンは86年に終了し、川上氏も同族経営が批判を浴びヤマハを離れた。時代は巡り、時は流れた。2年前、中島が浜松でコンサートを行った時、川上氏が車イス姿で訪れた。川上氏を見た中島は、世界歌謡祭でも見せなかった涙をステージ上でボロボロと流したという。

出典:『日刊スポーツ』1997年12月10日(水)「歌っていいなII」の14回、人生<3>

時代

作詞：中島みゆき

作曲：中島みゆき

歌：中島みゆき

今はこんなに悲しくて
涙もかれ果てて
もう二度と笑顔には
なれそうもないけれど

そんな時代もあったねと
いつか話せる日がくるわ
あんな時代もあったねと
きっと笑って話せるわ
だから今日はくよくよしないで
今日の風に吹かれましょう

まわるまわるよ時代はまわる
喜び悲しみくり返し
今日は別れた恋人たちも
生まれ変わってめぐりあうよ

旅を続ける人々は
いつか故郷に出会う日を
たとえ今夜は倒れても
きっと信じてドアを出る
たとえ今夜は果てしもなく
冷たい雨が降っていても

めぐるめぐるよ時代はめぐる
別れと出会いをくり返し
今日は倒れた旅人たちも
生まれ変わって歩き出すよ

まわるまわるよ時代はまわる
別れと出会いをくり返し
(2回繰り返し)

JASRAC 出 9713983-701